

「底が突き抜けた」時代の歩き方 382

アメリカを「帝国」へと突き動かしていくネオコンの論理

「米国とヨーロッパはもはや全く異なる世界観の上に生きている」と断言し、軍事力、経済力、情報力のすべてにおいて、とりわけ軍事力の圧倒的隔絶を提示してみせるアメリカにとって、もはやヨーロッパは用なしと断じて、世界中に強烈な衝撃を与えたネオコン随一の理論家ロバート・ケーガンのインタビュー記事が『SAPIO』(03・6・25)に掲載されている。「ネオコン」(ネオ・コンサバティブ=新保守主義派)をどのように定義しているかと訊かれて、こう答えている。

「ネオコンが唱える外交政策は、アメリカの力と影響力を駆使して、世界中に民主主義と自由の原則を普及させることです。これは、アメリカには国際秩序と国際平和を維持する責任と能力があると同時に、アメリカが力や影響力を行使することはアメリカだけでなく、広く世界中の国々にとっても歓迎すべきことだという哲学に基づいている。実は何も新しいものではなく、レーガンからケネディ、トルーマンや T・ルーズベルトといった歴代大統領に溯る伝統的な米国の基本的な外交方針といえます。」

現在のネオコンが、《この言葉が誕生した当時の本来の意味を失ったという見方》について

「その指摘は確かに当たっています。ネオコンとは、トロツキストや社会主義者、共産主義者といった左翼だった人物たちが1970年代に一種の保守主義に転向した、そうした特定のグループをもととは指したものでした。左翼主義から一転、新たに保守主義となったから、ネオコンサバティブと呼ばれた。それが言葉の由来なのです。冷戦中、こうしたネオコンの人々はソ連に対するデタント(緊張緩和)政策に反対し、軍備増強や共産主義とソ連に対するイデオロギー上の戦いを唱えていました。」

《その後、96年にあなたとウィリアム・クリストルが「現在の危険」を著わし、現在のネオコンの明確な指針を示した。》ことについて

「それは恐らく当たっています。アメリカを世界で最も力のある国にしておくことが、アメリカのみならず国際秩序や国際平和を維持するためには一番いい政策だというのが私の信念でもあります。それが、アメリカが中国やロシアと勢力の均衡を保つことよりも望ましいと考えます。」

《軍事力を背景に世界に平和をもたらすということ》なのか？

「第2次世界大戦でも、91年の湾岸戦争でも、99年のコソボ戦争でも軍事力を使って平和をもたらさざるを得ませんでした。今回のイラク戦争に限らず、軍事力を行使し

て平和をもたらすという手法は何も特別な選択ではありません。重要なのは、軍事力行使の目的が自由や民主主義の推進にあるということです。

《あなたはアメリカとヨーロッパの間の`軍事力の圧倒的な差`を強調されてい》るが「アメリカとヨーロッパの軍事力格差を決定的に示した例として、99年のコソボ戦争が挙げられます。戦争の過程は、まさに欧米間の軍事力格差を如実に反映したものとなりました。セルビアとコソボに対する空爆の大部分はアメリカ軍によるもので、情報収集能力でもアメリカが圧倒的に優れていたため、爆撃目標の99%はアメリカの情報によって決められました。軍事行動の圧倒的部分をアメリカが担ったことで、ヨーロッパは大きなショックを受けた。フランス、ドイツ、イギリスの一流の戦略家にとって、コソボ戦争はまさにヨーロッパの軍事力の無能ぶりを露呈したものでした。地理的に近いバルカン半島ですら、ヨーロッパは部隊を派遣する能力が比較にならないほどアメリカに劣っていたのです。

現在のヨーロッパが、たとえばイラクや北朝鮮のもたらす脅威に対して、許容度が高いのはなぜか。アメリカに比較して力が弱いからだと考えると分かりやすいと思います。

例えば、ナイフしか持っていない人は、森林をうろつく熊を許容できる危険だと考えるでしょう。この危険を許容しないのであれば、ナイフだけで熊と戦うしかない。しかし、同じ人が銃を持っていれば、許容できる危険についての見方がおそらく変わるはずです。戦うことだってできるのに、かみ殺される危険を冒す必要があるだろうかということになる。まったく正常なこの心理が、アメリカとヨーロッパの溝を生み出しているのです。イラク問題へのアプローチをめぐる意見が分かれたのもこのためです。

ヨーロッパは軍事力で劣ることから、当然のごとく、力の弱さが不利にならない世界を築くことに強い関心がある。ホップズのいう`万人の万人に対する闘争`の世界の冷酷な法則、国家の安全保障をめぐる決定的な要因が軍事力であるという世界の冷酷な法則をいずれは根絶やしにしたいと思っているのです。

一方、アメリカはヨーロッパに比較して、国の行動を規制するような多国間主義を支持するわけにはいかない。単独行動の善し悪しは別にして、アメリカは現在の一極構造の世界では、客観的にみてどの国よりも単独行動を禁止することで失うものが多いのです。」

9・11テロは、《外交政策の観点から、ネオコンの思想に大きな弾みをつけたと考え》るか？

「ブッシュ大統領の思考に劇的な影響を与えたのが、9・11テロだったことは間違いないでしょう。その意味において、同時テロがネオコンに弾みをつけたことも間違いありません。われわれは、冷戦終結後の世界にも依然として多くの危険が存在し、軍事力の強化は今後もアメリカの最重要課題だと主張し続けてきました。あの悲劇によって、われわれの長年の主張が裏づけられ、さらに強化する結果を招いたと思っています。」

《「ネオコンの論理」には、「ヨーロッパ」を「日本」に置き換えてもそのまま通じる箇所

が数多くあるが

「私はヨーロッパに既に3年住んでいます、日本については知らないことが多いので明快なコメントはできません。それを前提としていえば、イラク戦争の結果、ヨーロッパとアメリカの関係は傷つきましたが、日本とアメリカの関係は傷ついていません。日本はアメリカとの同盟関係を現在も重要だと考えていますが、ヨーロッパはもはやアメリカの庇護は必要ないと思っています。しかしながら、彼らは過去に例がないほどアメリカのおかげで『無料の安全保障』を享受している。」

《日本とアメリカにとっての目前の課題、北朝鮮の核にはどう対峙すべきと考えていますか？》

「まずは外交上のあらゆる努力をする必要があることはいうまでもありません。とはいえ、外交上の説得や経済上の譲歩など、危機を除去するために北朝鮮に対して行ってきた政策はことごとく失敗に終わっています。全体主義的な現体制が存続している限り、日本が北朝鮮と完全に国交正常化を果たすことも不可能だと思います。だからといって、安易に軍事力に訴えることを勧めるつもりもありませんが、それ以外の代替策もなかなか見当たりません。正直なところをいえば、北朝鮮に対して軍事力以外の外交的な手段を講じるチャンスは既に逸したと考えています。」

「米国流」の他国に対する武力行使が、ケーガンの以上の発言によっても裏付けられており、確かに彼がいうように、「何も新しいものではなく」、これまでの「歴代大統領に遡る伝統的な米国の基本的な外交方針といえ」る。「アメリカの力と影響力を駆使して、世界中に民主主義と自由の原則を普及させる」使命を持ちつづけてきているということのなかに、ネオコンの主張が殊更見出されるわけではない。しかし、ネオコンの思想がブッシュ政権に及ぼす影響の大きさを考えると、「伝統的な米国の基本的な外交方針」と、ネオコンの主張が基軸となっていくブッシュ政権の外交方針との間には、決定的な隔絶がみられる筈である。それは、「アメリカを世界で最も力のある国にしておくことが、アメリカのみならず国際秩序や国際平和を維持するためには一番いい政策だ」という発言にも認められるし、だいいち、「軍事力を行使して平和をもたらす」とか、「重要なのは、軍事力行使の目的が自由や民主主義の推進にある」とためらいの余地なく、堂々と信念をもって語られることはこれまでなかっただろう。

これまでの「伝統的な米国の基本的な外交方針」でもそうはっきりと断言することがなかったのは、「自由や民主主義の推進」という目的のためには軍事力行使も許されるという云い分には欺瞞が含まれているからである。つまり、目的のためには手段を選ばずという発想そのものがすでに破綻していることがどこかで感じ取られていた。革命のためには何をしてでも許されるという一昔前の理屈は、もう通用しなくなったと我々は思い込んできた。手段の悪を通じて目的の善が達成されることなど、論理的にも現実的にもありえなかった。なぜなら、手段が目的の善に相反するなら、実現されるのは悪でし

かなかったからだ。目的の善が達成されるためには、手段の善でしかありえなかった。そんなことは自明の理だと思っていたのに、ケーガンははっきりと自由や民主主義を実現するためには、軍事力を行使したってかまわないといっているのだ。いや、軍事力行使でしか自由や民主主義を手にすることができないとすらいっているように聞こえる。もちろん、軍事力行使によって獲得される自由や民主主義とは、軍事力抜きでは成り立たないような自由や民主主義であることは間違いない。

おそらくケーガンは自分が明言していることに、欺瞞が含まれていることを感じ取っている筈だ。だが彼が、「第2次世界大戦でも、91年の湾岸戦争でも、99年のコソボ戦争でも軍事力を使って平和をもたらさざるを得」なかったというとき、軍事力行使にどれほど嫌悪感を抱こうとも、実際には我々の歴史は軍事力の行使によって歩んできたのではないか、その現実を直視せよ、という声が力強く聞こえてくる。確かに武力を用いずに話し合い等によって平和的解決が図られたということはこれまでほとんどなかった。しかしながら、やむをえず、あるいは他に選択肢を見出せずに、軍事力の衝突によってこれまで問題の解決を図ることしかできなかったとしても、そのありかたとケーガンが主張するように、「軍事力を行使して平和をもたらすという手法」とは決定的に相違しているのが感じられる。その相違は、これまでの軍事力行使にはどこかためたいが含まれていたのに、ケーガンの主張にはもはやためらいが皆無となっているところにあらわれている。

一言でいえば、ケーガンの主張に後押しされたブッシュ政権は、「ルビコン川」を渡ったのだ。別のいいかたをすれば、「軍事力を行使して平和をもたらすという手法」から、軍事力行使によってしか平和をもたらすことができないという地平への転換であり、軍事力行使＝平和という等号を強引に成り立たしめる手法の確立であった。この手法から当然の如く導き出されるのは、イラク攻撃にみられたような先制攻撃論であった。この先制攻撃に対しては、世界に気に入らない国があるからといって先制攻撃が許されるなら、世界は破滅と混乱に陥るだけではないか、という至極当然な反対論が続出したが、ケーガンの主張を目の前に置くと、先制攻撃が許されるのはアメリカだけであって、アメリカ以外のどの国も許されないと考えている（らしい）のがわかる。隣国のクウェートに侵攻（先制攻撃）したイラクが、湾岸戦争においてアメリカ主導の多国籍軍に撃退されたのはまだ記憶に新しいところだ。

「アメリカを世界で最も力のある国にしておくことが、アメリカのみならず国際秩序や国際平和を維持するためには一番いい政策だという」ケーガンの主張が、「アメリカはヨーロッパに比較して、国の行動を規制するような多国間主義を支持するわけにはいかない。単独行動の善し悪しは別にして、アメリカは現在の一極構造の世界では、客観的にみてどの国よりも単独行動を禁止することで失うものが多い」という彼の云い分に結びつくと、そこから世界中の国がたとえ反対しても、アメリカは「国際秩序や国際平和

を維持するためには」先制攻撃も辞さない、という考えが導き出されるのはそれほど突飛ではない。ただし、その先制攻撃が許されるのはアメリカだけであり、アメリカだけでなければならないのは、アメリカが「世界で最も力のある国」であるからということなのだ。

いうまでもなく「米国流」の国際秩序と国際平和の維持が、世界中の国々によって歓迎されているとは限らない。仮に「米国流」の自由や民主主義に憧れることがあっても、軍事力行使を通じてそれらが実現されることには反対だ、という声は当然起こりうる。要するに、「米国流」の平和や民主主義を力づくで押しつける手法には断固反対するという立場は根強い。「米国流」のこれまでのどんな主張も、断固反対の立場に向き合うことをしられ、無視することはできなかった。ところが、ケーガンに代表されるネオコンの思想は、もはやそんな反対の立場に向き合わなくなった。無視するというよりも、彼らの視界の中に入ってこなくなったといえる。なぜなら、「米国流」に反対するどの立場も、細分化された局地的なものであって、「国際秩序や国際平和を維持する」ことを掲げたアメリカが、「世界で最も力のある国」として課せられている使命からすれば、問題たりえない不平不満にしかすぎなかったからだ。

そんなアメリカを傲慢とみなしたり、独断と偏見に満ち満ちた「米国流」と批判することはたやすいが、アメリカが自己の「米国流」に固執する自信は一体どこからやってくるのだろう。それはまず移民の国として半分近くのマキシコ領土や、ハワイ、グアムを奪い取って、領土を拡大しながら建設してきたアメリカ合衆国を、(「米国流」であれ)自由と民主主義を標榜する世界一豊かな超大国に育て上げたという自信に裏打ちされていることは間違いない。更に、第二次大戦を通じて軍国主義の日本に「米国流」の自由と民主主義を植え付けて、親米国家に転換させ、世界第二位の経済大国に成長するのを手助けしたという自負も手伝っているだろう。そんなアメリカからすれば、戦後日本の奇跡的な繁栄ぶりは、勝敗と関係なしにお見舞いした二発の原爆から生み出されたものとして映っているような気すらする。

武力行使で領土を奪い取ってであれ、圧倒的な軍事力行使で相手国を敗北に至らしめてであれ、アメリカが関与して「米国流」の自由と民主主義を植樹してきたところは、すべて成功しているという自信がアメリカに「米国流」を固執させているにちがいがなかった。「終わりよければすべてよし」の考えがそこには貫かれており、アメリカ以上にすぐれた自由と民主主義を提供する国は世界のどこにも存在しなかったし、アメリカ以上にその力が最大に備わっている国も世界のどこにも存在しないと自身にみなされており、実際そうであるかもしれなかった。しかしながら、作家の曾野綾子も口を酸っぱくして繰り返していたように、「米国流」の自由と民主主義にいくら憧れても、それがどうしても合いそうにない砂漠に建設された部族国家が世界に存在しているのも事実であった。

ケーガンへのインタビューで興味深いのは、「ネオコンとは、トロツキストや社会主

義者、共産主義者といった左翼だった人物たちが1970年代に一種の保守主義に転向した、そうした特定のグループをもととは指し」ており、「冷戦中、こうしたネオコンの人々はソ連に対するデタント（緊張緩和）政策に反対し、軍備増強や共産主義とソ連に対するイデオロギー上の戦いを唱えてい」たという説明である。ネオコンに転向した人々の左翼主義というものが、ソ連を盟主とする東欧圏の（国家）社会主義的な考えや中国の毛沢東思想などとは異なる、反主流派的な考えであることは推測がつく。主流派をスターリニストと呼称するなら、反主流派はトロツキストと呼称されるかもしれないし、あるいはそれまでの既成のレフトに対するニューレフト（新左翼）といえるかもしれない。日本の新左翼なら反帝・反スタをスローガンに、反米・反ソを掲げていたのに、アメリカのニューレフトはアメリカとソ連のいずれに組するかという二者択一の上に立って、アメリカがソ連化されるよりも、ソ連がアメリカ化されることのほうを選び取ったのだ。

この構図から想い起こされるのは、アメリカの原爆開発が、ナチスの迫害を逃れてアメリカに移住したユダヤ系の理論物理学者レオ・シラードに勧められて、ノーベル賞物理学者のアインシュタインが、「ドイツでウランに関する研究が繰り返し行われている」と警告した39年8月2日付の一通の手紙を、ルーズベルト大統領に宛てたことが発端になったという事実である。つまり、ナチス・ドイツが先に原爆を開発するようなことになれば、ヨーロッパ全土はもちろんのこと、アメリカまで吹き飛ばされることになるという警告であった。その警告に従って二年後にマンハッタン計画に着手することになったが、原爆開発の当初の目的はナチス・ドイツの原爆開発計画に対抗することにあった。ところが、マンハッタン計画が正式に発足した二年後の44年には、ドイツの原爆開発が進んでいないことがわかり、その時点で開発が中止されずに投下目標がドイツから日本に変更され、その一年後の45年5月にドイツが降伏し、原爆投下目標は日本に決定した。

アメリカの原爆開発に関する経過のなかでのそれぞれの役割を、たとえばナチス・ドイツをソ連に、日本をイラクに置き換えるなら、原爆開発を勧めたアインシュタインら物理学者は、「ソ連に対するデタント（緊張緩和）政策に反対し、軍備増強や共産主義とソ連に対するイデオロギー上の戦いを唱えてい」たネオコンの人々にそっくりそのまま当てはまる。ナチス・ドイツという投下目標を失った原爆開発は中止されずに、日本へと投下目標を切り換えられていく図式は、ソ連が崩壊することによってネオコンの「ソ連に対するイデオロギー上の戦い」も終焉したにもかかわらず、イラク等の「悪の枢軸」への戦いに切り換えられていく図式とそのまま打ち重なっていた。原爆開発が当初の投下目標のドイツがどうなるうとも、どこかに投下せずにはおれなくなる「自律的なモメンタムを持つ化け物」にすでに膨れ上がっていたように、ソ連が自壊しようとも、ネオコンが後押しするアメリカの国家目標もすでに「自律的なモメンタムを持つ化け物」に

まで成長しつつあったといえるかもしれない。

実際、ソ連が自壊したとき、ネオコンがもしニューレフト的な感覚を引きずったままであったなら、彼らの役割は終えていたにちがいない。なぜなら、ソ連を牙城とするスターリニズム共産圏が瓦解することによって、もはやアメリカがソ連化される懸念は杞憂に終わったからだ。だが彼らの左翼主義が冷戦時代にネオコンへと転向したということは、彼らの主張が対ソ連に限定されずに、「米国流」の世界観を世界に広めていく思想と論理へと触手を伸ばしていったことが推測される。「アメリカには国際秩序と国際平和を維持する責任と能力があると同時に、アメリカが力や影響力を行使することはアメリカだけでなく、広く世界中の国々にとっても歓迎すべきことだ」という哲学に基づいて、「世界中に民主主義と自由の原則を普及させること」が、ネオコンの外交政策だというケーガンの発言を目にすると、ネオコンの左翼主義からの転向そのこと自体が、「転向とはなにか」という問いを孕んでいることに気づかされる。

社会主義であれ、共産主義であれ、あるいはどのようなイデオロギーであれ、いまある状態が改善される方向に踏み出す一歩に向けてのものであるのは間違いない。ロシアの民衆が革命を起こして未来の社会主義社会を目指したのも、帝政ロシア時代での自分たちの生活が少しでもマシになることを望んだからであった。しかし、酷い困窮に耐えてからの暮らしはいくら改善されたものの、革命以降の社会主義時代に実現されたのは、唾棄すべき資本主義社会が手にしている自由や民主主義に較べるべくもない収容所群島であった。その収容所群島国家はけっして一時的なものではなく、恒常的ですからあり、そうでなければスターリニズム体制がやっていけない不可欠な特質であった。左翼主義時代のネオコンが、理念的には社会として進歩している筈の社会主義社会が資本主義社会よりはるかに後退しており、その遅れは現行のスターリニズム体制では永遠に取り戻すことができないという、ソ連の実態を目の当たりにしたとき、彼らの左翼主義がソ連を問題とするよりも、現行の世界で達成されているアメリカの最良の自由と民主主義と経済的繁栄を世界に広げることのほうがより左翼的ではないか、と自問しはじめたとしてもけっして不思議ではなかった。

自分たちの左翼主義は、「共産主義とソ連に対するイデオロギー上の戦いを唱え」ることにあるよりも、アメリカで実現されている自由や民主主義を推進することにあるとめざめたとき、彼らは堂々と胸を張ってネオコンへと転向していったにちがいない。しかし、その転向が単なる保守主義への回帰ではなく、ネオコン（新保守主義）と呼ばれるのはどうしてだろう。ネオコンと従来の保守主義とはどこが、どう異なるのか。従来の保守主義や右派は、ネオコンの台頭をどのようにみているのだろう。朝日新聞のコラムニスト船橋洋一は『週刊朝日』の連載（03・4・25）で、右派の論客、パット・ブキャナンの次のような言葉を拾い上げて感想を付け加えている。

《ブキャナンは開戦後、「だれの戦争？」という論評で、ネオコン攻撃ののろしを上げた。

「彼らの傲慢さと、うぬぼれと、好戦的態度のせいでわれわれは世界中のイスラムと西欧社会の友人と同盟国を疎外してしまった」

「彼らの政策はシャロン（注）の利益になるかもしれない。しかし、はたして米国の利益になるのだろうか」

「この戦争は、ハンチントンが警告した『文明の衝突』を引き起こすことになりかねない。それは米国にとってまさに悲劇であり災難となるだろう」

「ブッシュ大統領はこれらのネオコンの罠にはまってしまっている。冷戦時代、2世代にわたってつくりあげてきた平和をかなぐり捨てるように」

「彼らは批判する者を反ユダヤ主義者と非難する。それは間違っている。イスラエルにとってよいことは米国にとってよい、との彼らの前提そのものが間違っているのだ」

私の友人の大学教授（国際政治専攻）は、このブキャナンの論評を読んだ感想を次のように漏らした。

「ブキャナンの書いたものなど、これまで一度も読んだことはないし、これからもないだろう。しかし、ある人に言われてそれを読んでみて、そのとおりだと思った。そして、何かとても情けない気持ちになった」

ブキャナンには反ユダヤ主義的言動がある。いかにメッセージに真実が含まれていてもメッセンジャーが怪しげでは、そのメッセージ力は損なわれる。しかし、そうした瑕疵を承知しても一流の国際政治学者がなおそれに言及したくなるほど、ネオコンに対する不安と警戒感もまた強まっているのだろう。》

（注）のシャロンとはイスラエルの現首相であり、対パレスチナ強硬派指導者として知られる。ブキャナンのネオコン攻撃に「反ユダヤ主義的言動」が含まれるのは、船橋洋一もいうように、《ネオコンの中心的指導者にはウォルフォウイツやパールなどユダヤ人が多い。》からだ。《ただ、ネオコンをユダヤ人の独占物のように見るのは間違いである。また、米国のユダヤ系が米国をイラク戦争に引き込んでいったとするのも一面的な見方である。ユダヤ系のイラク戦争支持層は59%という世論調査もある。これは全米の一般水準とほぼ同じか、むしろやや低めである。》ユダヤ人がネオコンに多いかどうかよりも、《そもそもネオコンは左翼から右翼への転向組である。》というところに、彼はネオコンの特性をみている。

ブキャナンに代表される右派とネオコンとの決定的な相違は、先のブキャナンの論評からも窺われる。イラク攻撃によって「われわれは世界中のイスラムと西欧社会の友人と同盟国を疎外してしまった」し、「冷戦時代、2世代にわたってつくりあげてきた平和をかなぐり捨てて」しまったという論評は、明らかに「軍事力を行使して平和をもたらす」というケーガンの主張とは真っ向から衝突する。ブキャナンの言う「冷戦時代、2世代にわたってつくりあげてきた平和」は、ネオコンの眼には無秩序状態と映っており、ケーガンが、「ブッシュ大統領の思考に劇的な影響を与えたのが、9・11テロだ

ったことは間違いないでしょう。その意味において、同時テロがネオコンに弾みをつけたことも間違いありません。」と語っていたように、9・11がブキャナンら保守派とネオコンの対立に決着をつけ、「あの悲劇によって、われわれの長年の主張が裏づけられ、さらに強化する結果を招いたと思っています。」というケーガンの言葉が続くのだ。

9・11テロはどこから発射されたのか。冷戦終結後の世界の平和な状態から発射されたのか、それともその世界の混沌とした無秩序状態から発射されたのか、という二項対立的な問いが設定されてくるとき、ブキャナンらの平和論は敗退し、ネオコンの世界無秩序論に軍配が上がるのは確実だった。伝統的な右派にとってすら、9・11テロを機にアメリカを「好戦的態度」へと一気に転向させていくネオコンの台頭は腹に据えかねていたのだ。これまで一度も眼を通したことの無いブキャナンの論評を読んだ大学教授が、「そのとおりだと思った。そして、何かとても情けない気持ちになった」という感想を漏らすのも、右派のブキャナンの論評ですら首肯せざるをえなくなるほどに、9・11以降のアメリカの「好戦的態度」は常軌を逸しているように感じられて、「何かとても情けない気持ちになった」ということであったのだろう。

冒頭のロバート・ケーガンも設立者として名を連ねる、ネオコンの総本山ともいうべきシンクタンク「アメリカ新世紀プロジェクト(PNAC)」の事務局長を務めるゲリー・シュミットが、インタビュー(『SAPIO』03・5・14)に答えて、新保守主義派(ネオコン)の思想や、実現すべき方向性について語っている。

「我々は新保守主義派ではなく、『レーガナイト派(ロナルド・レーガン大統領派)』と呼んでいる。この組織は97年に立ち上げた。当時、(共和党内では)国際問題をめぐる議論が、パット・ブキャナンに代表される新孤立主義派と、ヘンリー・キッシンジャー元国務長官やスコークロフト元大統領補佐官などに代表されるリアリストの国際主義派に二分されていた。しかし、この2つのアプローチでは不十分だと考えたわれわれはレーガナイト派を立ち上げた。われわれは、リアリストの観点に立脚する国際主義派だが、伝統的なリアリストとは違って、国際安全保障上、核心の問題は安保環境の安定化ではなく、民主主義の普及であると考えている。民主主義が普及して、民主主義国家が互いに協力しあうようになれば、世界はよりよい方向に向かうと考える。このアメリカが追求する『民主主義の普遍化』というビジョンを実現する上で、実際に推進力となってきたのは国連などの国際機関ではなく、あくまでもアメリカや同盟国の力なのである。

今の『新保守主義者』の親たちの多くが新保守主義者だったため、われわれも『新保守主義派』と一括りに呼ばれるが、本来の新保守主義者はもっぱら国内政策課題にフォーカスしていた人々だ。外国政策面では新保守主義者は見解をあまり共有しなかった。例えば、新保守主義派の代表格の一人ジーン・カークパトリック元国連大使は冷戦後、『アメリカは普通の国に戻るべきだ』と主張していたが、われわれはこのような見解には反対だ。正しい理由に基づくのであれば力行使すべきというのが、あくまでもわれ

われのポジションである。

70年代、ソ連をどうするかという論争があった。ベトナム戦争後、キッシンジャーはアメリカの衰退する国力をコントロールするために、リアリストの視点から、米ソ間のバランス・オブ・パワーを追求した。このような考え方に挑戦したのが、ソ連を『悪の帝国』と呼んだレーガン大統領だった。レーガンの考え方に共鳴した数多くの民主党員が共和党に転向した。ブッシュ大統領の『悪の枢軸』発言は、まさにこのレーガン大統領の発言の系譜の上にあるといえよう。今のブッシュ大統領の考え方は、政策面では父親のブッシュ大統領よりも、レーガン大統領に近い。父親のブッシュ大統領が、湾岸戦争やユーゴスラビア紛争などで、『安定化』を重視したのに対し、9・11テロ以降、今のブッシュ大統領は『安定化』よりも、危険な『ならず者国家』の専制君主政権を民主化させることをより重視するようになった。これこそが、アメリカが直面する安全保障上の問題を、真に解決するための長期的手段だと考えている。」

発言中の「新孤立主義派」と「国際主義派」については、次の註が付されている。

《「新孤立主義派」は2つの意味で用いられる。まず、パトリック・ブキャナンに代表される、「新世代の孤立主義者」との意味。彼らは、19世紀のモンロー主義（孤立主義）と同様、アメリカによる他国への不干渉などを主張する。次に、海外への介入を否定しないが、いわゆる一国至上主義を標榜する人々を指して使われることもある。ここでは前者の意味で用いられている。他方、国際主義派は、アメリカの国益を守るために海外への介入を積極的に支持し、世界におけるアメリカの主導的立場を重視する。単独行動より多国間主義を強調する傾向が強い。》以上の註記から、「新孤立主義派」の特色である《アメリカによる他国への不干渉》に対して、アメリカが追求する「民主主義の普遍化」の実現のために海外への介入を積極的に行っていく点で異なり、「国際主義派」の《単独行動より多国間主義》で海外への介入を行っていくことに対しては、多国間主義を重視しない点で異なっているところに、レーガナイト（ネオコン）の特質が見られる。《レーガナイト（ネオコン）がブッシュ政権を牛耳っている》という説に対して、シュミットは、9・11以前は「リアリスト、レーガナイト、新孤立主義派の混成で、大統領自身がいずれかに特に肩入れしたこともなかったと思う」が、「しかし、9・11テロでブッシュ大統領は戦略の重心を移した。レーガナイトがブッシュ政権の政策を牛耳ったのではなく、9・11テロによって、我々の主張の有効性がより認識されるようになったのが実態だ。」と語り、「9・11テロ以降、ブッシュ政権では、世界の諸問題に対する考え方にパラダイム・シフトともいえるべき目覚ましい変革が生じた。冷戦後の世界におけるアメリカの役割や、アメリカが直面する脅威について、ブッシュ政権が国家安全保障戦略（いわゆる先制攻撃を認めたブッシュドクトリン）などを通じてはじめて明確化した。そして、アメリカが一度行動すると決定すればこれほど迅速に行動できるというのは、きわめてアメリカ的であり、ある意味でアメリカの『美德』でもある。

しかし、それを他の国々がすぐに理解、同意してくれるとは思えない。／欧州のフォーカスが内向きになる一方、アメリカが世界における役割を再考しなおした結果、現在の緊張関係が米欧間に生まれたわけだ。」と、ブッシュドクトリンに対する評価を表明する。

そして、《中東を含む世界中のあらゆる地域で、「アメリカは民主主義の名の下、帝国主義的拡張を目指している」との批判がある。》ことに対して、「アメリカの圧倒的な力を考えれば、諸外国の懸念は十分に理解できる。ただ、これまでアメリカがいかにその力を使ってきたかを考えて欲しい。第2次世界大戦終了後にもアメリカは同様に卓越した力を持っていたのに、世界征服などを企んだわけではない。アメリカの今後の行動パターンを考える上で、過去のパターンを分析することが重要だ。また、今回のイラク戦後に然るべき民主主義政権を確立できれば、アメリカの行動の正当性も認識されるようになるだろう。アメリカの力強さについて、われわれ自身も依然慎重に考えなければならないが、だからといって力の行使を控えるのではなく、賢明なかたちで行使すべきと考える。」とシュミットは答えているが、彼やケーガンの主張に底流しているのは、アメリカの圧倒的な軍事力をどのように「賢明なかたちで行使すべき」か、という問いであるのがわかる。

たとえば、「アメリカは普通の国に戻るべきだ」という主張に対しては、もはや「普通の国に戻る」ことができないほどの超絶した軍事力を備えている事実を直視するなら、問題はその圧倒的な軍事力の行使の仕方にあるというネオコンの主張が導かれる。新孤立主義派の唱える他国への不干渉政策に関しても、9・11以後は「賢明なかたちで」の軍事力の行使が優位に主張されても不思議ではないし、また国際主義派の多国間主義に対しても、アメリカの図抜けた軍事力はそぐわなくなっている。ケーガンは、「ナイフしか持っていない人は、森林をうろつく熊を許容できる危険だと考えるでしょう。この危険を許容しないのであれば、ナイフだけで熊と戦うしかない。しかし、同じ人が銃を持っていれば、許容できる危険についての見方がおそらく変わるはずです。戦うことだってできるのに、かみ殺される危険を冒す必要があるだろうかということになる。」という譬えを用いて、銃を持っているアメリカが、「森林をうろつく熊」と戦わないことの無理を説き、銃で熊と戦うことの必要性を主張していた。

この譬えで興味を惹かれるのは、人と「森林をうろつく熊」という対比である。「熊」は当然、イラクや北朝鮮を指しており、悪人ですらなく、人と同じ次元には存在しない、戦って倒さなければこちらがかみ殺されてしまう野獣に凝せられている。福田和也は、ケーガンがホップズの『リヴァイアサン』の「怪物」に今のアメリカを見立てているとして、『週刊新潮』の連載時評(03・4・3)で、『ライオンがインパラの親子を襲い、食いちぎるのを、文明人はテレビ画面で見て悲憤慷慨するけれども、猛獣にとっては何の関係もない。ライオンが獲物を倒すのは、「正当」なこと、そういう「正当性」を、今のアメリカは持っている』と記し、アメリカをどう猛な肉食獣に、イラクをライオン

に襲われるインパラに譬えたが、インタビューに答えるケーガンからすれば、銃を持つ人が圧倒的な軍事力を持つアメリカであり、「森林をうろつく熊」はイラクや北朝鮮で、戦って倒すしかない危険な猛獣なのだ。

この譬えでケーガンは、「銃を持っている人」(アメリカ)と「森林をうろつく熊」(イラクや北朝鮮)との関係についてのみ語っているわけではない。「ナイフしか持っていない人」(ヨーロッパ)と熊との関係や、「銃を持っている人」との関係についても語っている。「ヨーロッパは軍事力で劣ることから、当然のごとく、力の弱さが不利にならない世界を築くことに強い関心がある。」と落ちてくし、「アメリカはヨーロッパに比較して、国の行動を規制するような多国間主義を支持するわけにはいかない。単独行動の善し悪しは別にして、アメリカは現在の一極構造の世界では、客観的にみてどの国よりも単独行動を禁止することで失うものが多い」といういいかたで、「銃を持っている人」は「森林をうろつく熊」を前にして、「ナイフしか持っていない人」と同じ行動を取ることができないのは当然だ、と主張する。

だがケーガンのこの譬えで語らずして語っていることは、なんといっても「ナイフしか持っていない人」のなかに「銃を持っている人」が登場しているという事実である。アメリカとヨーロッパにおける軍事力の格差は、銃とナイフの格差に相当しており、ナイフしか持っていなければ、「森林をうろつく熊」に対してその程度の対応しか取りえないように、銃を持っているなら、銃を持っているような対応を熊に対して取ることができるということだ。ケーガンによれば、アメリカは自分が「銃を持っている」ことを発見し、同時にヨーロッパが「ナイフしか持っていない」ことを発見したのである。自分が「銃を持っている」ことを発見したアメリカは、同時にその銃をどのように行使すればよいかも発見することになったのだ。

冷戦時代は米ソの力の均衡によって、熊が森林をうろつくことは抑えられていた。ところが冷戦が終結すると、熊は森林をうろつくようになり、とうとう9・11に熊はアメリカに牙を剥き出し、アメリカは各地で熊がうろつき始めていることを覚るようになった。そうすると、アメリカは自分の力で熊と戦い、退治しなければ、世界は安閑としていられなくなるというのが、ケーガンらネオコンの主張であり、論理であった。本当にこの世界は「森林をうろつく熊」に満ちている、危険で混沌とした世界であるかどうかは断言できないが、彼らがこの世界をそのような危険に満ちた世界であると断定したとき、彼らの主張がアメリカの行動における思想と論理として血肉化され、突っ走っていくことになるのは、ある意味で必然であった。もちろん、ケーガンらネオコンの主張がアメリカを必要とした以上に、アメリカのほうで彼らの主張を必要としたことのなかに大きな問題が隠されているのは明白である。

2003年9月3日記

